2020 年度前期　授業改善アンケート集計結果に対する意見
―経済学部―

経済学部長 小宮路　雅博

2020 年度前期の「授業改善アンケート」は、実施時期に新型コロナ感染症対策で全面遠隔授業となっていたため、実施方法が例年の教室での実施から Web 上での実施に変更されている。また、アンケートの大枠には変更はないが、個々の質問項目（質問票上は Q6 ～ Q18 、集計結果では設問 1～13）の多くは遠隔授業に合わせて変更されている。従って、これらの項目の回答結果については、例年との単純比較は困難となっている。

今回、経済学部のアンケートにおいては、実施必須科目は 205 科目であったが、Web アンケートという性質上、その全てでアンケートが実施されており、100％の実施率となっている。しかし、教室での「会場アンケート」に比して、当然のことながら Web アンケートの回答率は低く、「延べ回答者数/延べ履修者数＝回答率」をみると教室での実施であった昨年前期が 63.4％（この比率はアンケート当日の出席率とほぼ同じ）であったのに対し、今回は 22.4％となっている。この低回答率故に、実施は 100％であったが、経済学部では実際には回答者が誰もいない科目が 4 科目発生しており（これらの科目は元々、履修者数が少ない科目でもある）、集計結果上は、便宜的に実施必須科目数と実施科目数の差、4 科目として表示されている。また、一般的に言って、アンケートに回答するか否かそのものが、一種のフィルターなり意思表明として機能するから、回答の諾否がより回答者の自由裁量に委ねられる Web アンケートでは、この面が強く出ている可能性がある。

結果全体を通してみると、回答対象となっている設問項目（設問 1～13）中 3 項目において 5 点尺度で平均値 4.0 以上、他の各項目でも（後述の設問 13 を除き）3.72 以上となっており、概ね高い評価を得ているものと考えられる。もちろん、「満足度調査」においては、満足者が積極的に回答し、不満足者は調査への回答を忌避する傾向がある（アクティブな不満足者は不満足をもっと他の方法で表明する）とも言えるので、回答していない 8 割近くがどのように考え、評価をしているかについては意識する必要がある。

個々の質問項目について若干のコメントをすると以下のようになる。

「設問 1：円滑な受講」については、回答学生の 8 割が「とてもそう思う」「そう思う」と回答し、トータルで 4.05 ポイントとなっている。今回は、急遽、全面遠隔授業となったが、ここからは回答学生たちが、概ね円滑に受講できていたことが伺える。もちろん、Web を介した遠隔授業の円滑な受講について Web によるアンケートを行っている点については（現実的なアンケート実施方法が他になかったのではあるが）改めてここで触れるまでもないことである。

「設問 2：受講生の努力」については、トータルで 4.29 ポイントとなっている。これは、設問 1～12 中、最も高い項目となっている。遠隔授業においては、学生の自発的・積極的な

取り組みが求められ、これは、一方で「真面目に勉強するようになった」「教室での面接授業よりも、学習効果がむしろ高いのでは」とも評され、また、一方で「学生の負担が増加」「かなり真面目に取り組まないとならなくなった」「課題量が多く、疲弊」とも指摘されているが、何れであっても受講生の努力が求められることになるので、設問 2 が最も高いのはこの間、言われてきたことと合致しているとも言えよう。

他に（どの項目も概ね高い評価点なのであるが）評価が比較的高かった項目としては、「設問 3：教員の十分な指示(3.97)」「設問 4：教員指示の分かりやすさ（3.88)」「設問 5：課題量の適切さ（3.86)」「設問 7：遠隔ツールの適切使用(3.93)」「設問 12：授業資料の見やすさ(3.86)」等が挙げられる。これらは、教員側の遠隔授業への適応度やスキル・習熟を示す項目と解されるので、前期は教員にとっても急遽、全面遠隔授業となったのであるが、これらの数値からすれば概ね良好に遠隔授業が行われていたものと考えられる。

一方、数値上、評価の相対的に低い項目としては「設問 8：教員との双方向のやりとり（3.72)」が挙げられるが、遠隔授業に合わせて設定された初めての設問と言うことであるので、3.72 の高低についてのコメントは今回は控えたい。

また、「設問 13：1 週間当たりの当該科目の勉強時間（2.52)」は、昨年度までの「設問 12：授業時間外の事前・事後学習時間」となっていた設問に対応するものである（因みに設問 13 は、数値としては平均値が 2.52 と最も低いが、他の設問の肯定・否定軸とは全く異なるので、この点を言っても詮無いことである)。これまで唯一、授業時間外のパフォーマンスを尋ねるユニーク項目となっていた設問であったが、今回は全て遠隔授業となり、on demand 型の場合は特に授業時間内/外の区別が曖昧になることや Zoom などのリアルタイムの授業時間を含めるか否かが設問からはなかなか読み取れないこともあり、平均値、また回答の選択肢の割合（例えば、①3 時間以上が 7.8%）についてコメントすることには難しさがあるものと思われる。

「設問 11：総合評価」は、授業への全般的評価を示すものとして設定されており、3.88 の数値は良好なものと言えるだろう。昨年度も同じ設問があり、3.98 であったので、全面遠隔授業となった今期も評価平均上で殆ど変わらないのは興味深い点である。設問 11 との相関係数の観点では、学生自身の成果実感項目「設問 10：この分野への興味・関心」が 0.81 と最も高く、次いで授業レベル（設問 6)、教員の授業スキル項目群（設問 3、4、7）の相関係数が比較的高くなっている。

授業手法（Ⅲ）については、選択肢ア～サのうち、ア以外の回答率は実際のところ、例年と余り変わりがなく、アの「課題（レポート等)」のみが回答率 90. 9%と突出して高くなっている。この回答率は、昨年度調査では 36.2%であったので、この点では、この間しばしば語られてきた「遠隔授業になると課題が多くなる」との主張を裏付けているものと思われる。もちろん、（とりわけ on demand 型遠隔授業における）出席確認の代替としての毎回の課題といったこともあるので、遠隔授業になれば課題（レポート等）が多くなって当たり前との解釈もあろうし、また、「課題が多すぎる」か否かは全く別の問題である点には注意し

たい。

身についた資質・能力（Ⅳ）については、「ア：この分野の知識、学力」が突出しており、これについては例年通りである。また、幾分高い「エ：言語運用能力」は語学科目群を反映しているものと思われ、こちらも例年と傾向は変わらない。今回の調査で興味深いのは「イ：論理的思考力」が低位ながら昨年の 2 倍以上（7.2→17.3%）となっている点が挙げられる。これは「遠隔授業の方が学習効果が高いのでは」との主張に沿ったものとも言え、また「遠隔授業故に学生各人が独りでより深く考え、取り組まねばならず、結果、論理的思考力の向上を実感できた」との解釈もできるのかもしれない。

また、オ以下の他の資質・能力についての回答は例年通りで、低位に留まっており、この傾向は、大学全体また各学部においても同様に見出せるものとなっている。或いは、これらの資質・能力向上の差分を半期 2 単位の個々の科目毎に区別して実感することは、（面接授業/遠隔授業に関わらず）多くの人にとって困難さがあるのかもしれない。

以上